

うまあら ぶち かっば
馬洗い淵の河童

再話・絵 山田辰美

清らかな瀬戸川は、ウリの匂いがする。この匂いのする川からは、鮎がたくさんわくんだってさ。捕っても捕っても大きな鮎が釣りあがるってこんだね。白波の立つ早瀬から捕ったもちり肩の上がった鮎は、さわやかなキュウリの匂いがして、うんまいだって。この豊かな川で育つのは鮎だけじゃなかっただよ。河童もたんといたそうだ。むか〜し、むか〜しのことだらね。



今日も村の若者が馬を引いて馬洗い淵にやってきた。野良仕事をしたのか馬の足元に泥がついている。初夏の日差しに、毛並みの良い栗毛が汗にぬれて光っている。若者はたずなを引いて馬洗い淵へと入り、ひざ位の深さのところまで馬を洗い出した。水をかけては藁でこすってやると、馬は気持ちよさそうに目を細め、ぶるぶると首を振った。だよ。

昔、このあたりの村には何頭もの馬が飼われていた。田畑を耕したり、大八車を引いて物を運んだりするのに使われていた。けれども、藤枝の宿にはそれよか、たっくさんの馬がいて、お江戸とみやこを結ぶ東海道で働いていたそうだ。その馬の世話は周辺の村の衆が助郷すけごうといって引き受けていた。村毎に順番が来ると、馬草まぐさを刈り取って運び入れ、馬の面倒めんどうをみて、お土産にこらしよと馬糞まぐそをもらって帰るのさ。時には、子馬を預けられてたり、働き盛りを過ぎた馬を分け与えられることもあったって。



与作も他の若者と同様に助郷すけごうの仕事は嫌いじゃあなかった。

宿場町しゅくばまちのにぎわいや街道裏の花町が好きだというわけじゃあなくてさ。馬の扱いは最初は怖々こわこわだったけど、慣れりゃ楽しいもんだった。任された馬と気心きごころが通じて、うまがあうようになるとそりゃあ楽しい。

与作が馬子歌まごうたを歌いながら、手際よく馬の世話をしていると、親方さんが「馬好きだね、おみあは。どうだい、子馬を1頭預けたいけえが」と言ってくれた。与作は大喜びで子馬一頭を引き受け、世話はげに励んだだよ。そんで、そんで、二度目の夏を迎えた。

水浴びを済ませると、いつものように土手のエノキに栗毛くりげをつなぐと、与作は大きな木陰こかげでゴロンと寝ころがった。与作はかすかな川風を受けて、気持ちよさそうに寝息ねいきを立て始めた。そんな様子をいつも河童かっぱが見ていただってたさ。

河童かっぱは馬が気になつて仕方がなかつただよ。与作の気付かないところで、いくどか馬と目が合っただけど、馬は河童かっぱを見ても犬のようにうるさく吠えることもなければ、噛み付くこともしない。馬にまたがって帰っていく与作の様子をいつも、うらやましく眺めていただってたさ。



河童^{かっぱ}は馬洗^{うまあら}い淵^{ぶち}から水の流^{なが}れにまかせてそおっとエノキに近づき、川からそろりと姿を現した。小学校の低学年ほどの背丈^{せたい}で、くりくりと大きい目を輝^{かがや}かせて、そっと馬に近づいた。馬は河童^{かっぱ}に気がついたけど、そのまま草を食べていた。

河童^{かっぱ}は眠りこけている



与作をよけて、エノキによじ登ったかと思うと、いきなり馬の背中に飛び乗^のりただって。びっくりした馬は前足を上げて空をかき、「ひひーん」と大きくいなないた。

河童^{かっぱ}は馬の首にしがみつき、かろうじて振り落とされなかったけど、大きい目をひんむいて慌^{あわ}てた。一番驚いたのは与作だった。慌^{あわ}てて飛び起きると、馬から飛び降りた河童^{かっぱ}が

川に向って逃げるところだったよ。与作は「このいたずらもんが」と叫んで、足元の石を捨てて投げつけた。当たるとは思わなかったさ。ただ、こらしめるつもりだったよな。



ところが、投げた石は逃げる^{かっぱ}河童のお皿に当たってしまったよ。^{かっぱ}河童はよろけながら川に姿を消しただっ。瀬戸川は何事もなかったように、さらさら^{せおと}瀬音を立てていただっさ。

翌日、与作はいつものように^{くりげ}栗毛を引いて、水浴びにやって来た。^{うまあら}馬^{ぶち}洗い淵は、数多い^{せとがわ}瀬戸川の淵の中でも一二を争う大きな淵だ。川が大きいうねる曲がりっ角に大きな岩山が突き出ているので、大水が出るたんびに岩の根元が掘れて、深い淵を作っていただえね。青々とした水面はラムネビンのような不思議な^{ちよう}模様^{えが}を描いていたっけ。上流からの流れ込みは激しく^{せおと}瀬音を立て、^{いわかげ}岩陰にくるくると渦を作っていただよ。淵の面はおだやかでも、底に向う流れは強いだね、きっと。流れてきた枯れ枝が渦に巻き込まれ、深みへ引き込まれてしまう。与作は^{あさば}淵の浅場で、馬の腹を^{わら}藁でしごいていただよ。馬は気持ちよさそうに目を細めて、ぶるぶると首を振って応えた。



与作と馬はウリくさい匂いにおに気が付かなかっただね。淵の底からたくさんの河童かっぱが泳いで近づき、与作と栗毛くりげの周りを取り囲んでいたっきだよ。お皿を割られて死かんじまった河童かっぱの仲間達なっただらね。馬の後ろうしろに回かった河童かっぱはすばやく馬のお尻しりこに手てを入れて、しりこ玉たまを抜き取とった。与作のお尻しりこにもいくつもの手てが伸びたけど、しっかりふんどしふんどしをしてたもんで、しりこ玉たまは抜かれななかなかなっただよ。「ヒエーッ」与作は悲鳴ひめいを挙あげて、岸かみに逃にれたけど、しりこ玉たまを抜かれた馬うまは腰こしが立たたなくなって、淵ふちの深ふかみにずるずると引ひき込まれてしまった。河童かっぱたちもちよちっとした仕返かえしのつつもりだっただえね。河童かっぱたちはおぼおれる馬うまを助たすけ上あげようとしたけど、無駄むだだった。淵ふちの水面すいめんから次々つぎつぎに顔かほを出だした河童かっぱたちは、おびおえる与作よさを見みて、済すまない事ことをしたと思おもっただらね。悲かなしそうな目めをして、何なにも言いわず淵ふちの底そこにぼちぼち帰っていっただって。

大事な馬が死んでしまって、若者はとても悲しんだだよ。そして、馬が好きだったエノキの
木陰にお墓を作ってやっただってさ。それからというもの、大雨が降って、どんなに瀬戸川
が暴れても、その堤だけは切れることがなかったというんだよ。与作の暮らしている村
を守っているかのようだったさ。いつの間にか、馬のお墓は馬頭観音と呼ばれて、川除け
地蔵として村人から大切にされるようになったそうだよ。

いまでもお地蔵様の広場はきれいに掃き清められ、花が飾られている。

花を手向け、手を合わせるのは村人だけじゃあなかっただよ。

そこで、時折河童の姿が見られるって言うんだよ。

むかし、むかしのことだらね。



河童の涙は

目もないよ

あ